オープンキャンパスにおける箱庭制作の意義の検討

人間科学部人間科学科　4年　小畑摩希子

1. はじめに

箱庭療法とは、1929年にローウェンフェルト（Lowenfeld, M.）によって子供の遊戯療法（Play Therapy）として考案された世界技法（world technique）を、カルフ（Kalff, D.M.）がユングの理論をベースに発展させた心理治療技法である。日本では河合隼雄らによって広められた。

内側が青く塗られた砂の入った木箱（縦57㎝×横72㎝×高さ7㎝）に、クライエントは自由にミニチュアを並べ、好きな世界を作っていく。クライエントがカウンセラーによって温かく受容的に見守られながら表現することが重要である。

2. 問題と目的

成井ゼミナールの活動の一環として、2008年から、大学のオープンキャンパスと大学祭において、箱庭療法体験を行っている。カウンセリング現場で箱庭療法が用いられるときは、カウンセラーとクライエントの関係性が成り立ったうえ、「自由にして保護された空間」で継続的に行われることが多い。一方私たちが行っている箱庭療法体験は、カウンセラー役であるゼミ生とクライエント役である体験者は初対面で、常に周囲に他人がいる環境の中での箱庭制作であり、「自由にして保護された空間」とは言えない。

このようにカウンセリング場面と比べ悪条件の中で箱庭を制作することでも、箱庭体験者にとって何らかの心理的な影響は起こるのだろうか。また、オープンキャンパスで高校生が箱庭療法を体験することにより、進学を考える高校生にとって進路においても影響を与えるのかを検討することを目的とする。

3. 方法

被験者：オープンキャンパスに参加し、箱庭体験をした者のうち、ひとりで箱庭制作を行った高校生11名（男性5名 女性6名、1年生1名　2年生3名　3年生7名）

調査時期：2010年8月21～22日

実施場所：神奈川大学横浜キャンパス742講堂

用具：箱庭用具一式、質問紙（気分調査票（坂野ら1994）、箱庭制作後のみ独自項目追加）

手続き：箱庭体験者に対し、箱庭制作前に質問

紙を実施、その後、箱庭制作に取りかかってもらう。教示・見守りはゼミ生に協力してもらったため、統一はできていない。箱庭体験終了後、再度質問紙に回答してもらう。

4. 結果

気分調査票は、緊張と興奮、爽快感、疲労感、抑うつ感、不安感の5因子、各8項目の計40項目からなる。また、箱庭制作後の質問紙には、独自項目として、神奈川大学への興味、心理学への興味、満足度を追加した。

前後差の平均値より、爽快感は上がり、他の4因子は下がる（図1）。しかし個人差が大きくばらつきがある。代表例として、感情に変化のあらわれた箱庭（図2～4）と、ほとんど動きのなかった箱庭（図5～7）を挙げる。

t検定より、箱庭制作後に緊張と興奮（$t(10)=2.25$, $p<.05$）が5％有意水準で下がっている。しかし、他の項目に関して有意差は見られなかった。

また、相関係数を見ると、緊張と興奮×心理学への興味（$r=-.638$, $p<.05$）、不安感×心理学への興味（$r=-.642$, $p<.05$）、疲労感×満足感（$r=-.679$, $p<.05$）にかなりの負の相関関係がみられた。さらに、神奈川大学への興味×満足度

表1　気分調査票の相関係数

		緊張と興奮・後	爽快感・後	疲労感・後	抑うつ感・後	不安感・後	神大への興味	心理学への興味	満足度
緊張と興奮・後	相関係数	1	-.080	.358	.569	.741**	-.572	-.638*	-.387
	N	11	11	11	11	11	11	11	11
爽快感・後	相関係数	-.080	1	-.325	-.078	-.206	.373	.146	.562
	N	11	11	11	11	11	11	11	11
疲労感・後	相関係数	.358	-.325	1	.930**	.742**	-.528	-.520	-.679*
	N	11	11	11	11	11	11	11	11
抑うつ感・後	相関係数	.569	-.078	.930**	1	.857**	-.506	-.552	-.562
	N	11	11	11	11	11	11	11	11
不安感・後	相関係数	.741**	-.206	.742**	.857**	1	-.567	-.642*	-.394
	N	11	11	11	11	11	11	11	11
神大への興味	相関係数	-.572	.373	-.528	-.506	-.567	1	.906**	.686*
	N	11	11	11	11	11	11	11	11
心理学への興味	相関係数	-.638*	.146	-.520	-.552	-.642*	.906**	1	.477
	N	11	11	11	11	11	11	11	11
満足度	相関係数	-.387	.562	-.679*	-.562	-.394	.686*	.477	1
	N	11	11	11	11	11	11	11	11

*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。
**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。
注：相関係数はPearsonの相関係数を使用

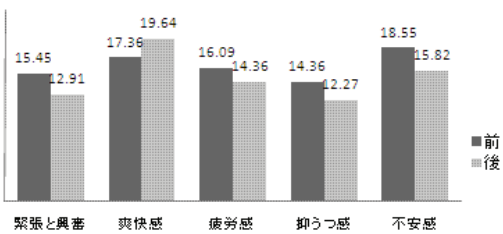

図1　気分調査票平均値

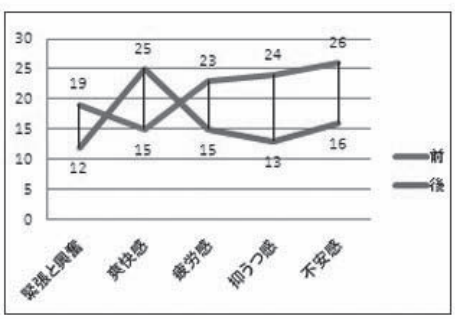

図2　被験者aの箱庭画像と気分調査票の前後差

図3　被験者hの箱庭画像

図4　被験者kの箱庭画像

図5　被験者cの箱庭画像

図6　被験者fの箱庭画像

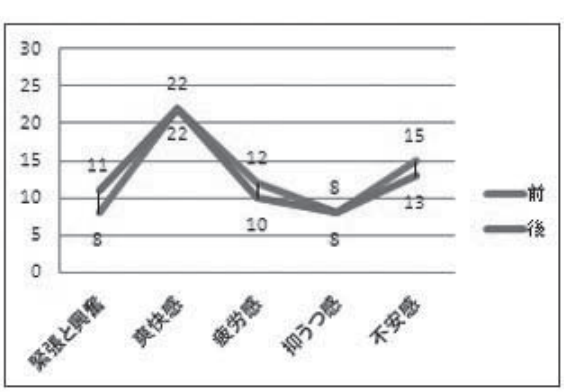

図7　被験者iの箱庭画像と気分調査票の前後差

（r=.686, p<.05）にかなりの正の相関関係が、神奈川大学への興味×心理学への興味（r=.906, p<.001）に高い正の相関関係がみられた（表1）。

5. 考察

集計結果の平均値より、前後差を比較して、箱庭体験を行ったことで、大学進学を考える受験生であることの緊張感や不安感、疲労感、抑うつ感などが減少し、爽快感が増したといえると推測される。しかしかなり個人差があり、被験者ごとに箱庭制作の前後の感情調査票の結果を見ると、大幅に感情に変化が出ている被験者と、箱庭制作前後でほとんど変わらない被験者とがあった。また、単純に箱庭作成が楽しかったと感じられただけの可能性がある。

特徴的な箱庭として、平均値のように得点が動いた（感情に変化が表れた）箱庭と、ほとんど得点に変化が現れなかった箱庭を挙げる。前者の箱庭は、被験者a、被験者h、被験者kが制作したものが挙げられる。特に目立った共通点は見られないが、被験者hと被験者kの箱庭は、海と現実で分割されているようである。また、被験者aと被験者kの箱庭は、滝がありエネルギーにあふれ、動物たちが生き生きと動いていそうだという印象を受けた。

後者の箱庭作品としては、被験者c、被験者f、被験者iが制作した箱庭を挙げる。こちらも客観的な印象ではあるが、被験者fと被験者iの箱庭は、どちらも戦っている様子や、未知との遭遇を思わせる。被験者cの箱庭に関しては、雨が降っている景色が気になった。

t検定より、緊張と興奮が有意に下がっていたため、箱庭制作により、大学のオープンキャンパスに参加している、という緊張が和らいだのではないかと考えられる。

相関係数より、気分調査票の因子間での相関は、それぞれ、大学受験を視野に入れ、オープンキャンパスに参加している高校生らしいものであるように思われる。高校3年生が多かったこともあるかもしれないが、やはり、不安と闘う時期なのであろう。

気分調査票と独自項目との相関においては、箱庭体験後に緊張や不安感がより下がった人ほど、心理学に興味を持ったと言える。これは、箱庭を作ることによって感情の変化を自らで感じることができ、その結果、心理学に興味を持ったのではないかと推測される。また、同様に疲労感がより下がった人ほど、箱庭体験への満足度が高いと言える。こちらに関しては、箱庭制作を楽しんだ結果として、満足度を得られたのではないかと考えられる。

箱庭制作後の満足度と神奈川大学への興味がかなりの相関、心理学への興味と神奈川大学への興味が高い相関を示していることから、箱庭制作で満足感を感じた人ほど、心理学の興味も高くなり、さらに、神奈川大学への興味も強くなったと言えるだろう。

これらより、「自由にして保護された空間」ではなくても、箱庭療法体験によって体験者自身に感情の変化が起こるため、意味はあるとわかった。また、オープンキャンパスという場での、ゼミナール紹介の一部としての箱庭療法体験であるため、元々心理学に興味を持って参加する高校生が多いこととは思われる。実際に体験してみることで、受験を控えた高校生にとってほとんど初めて心理学に触れる体験であるとともに、箱庭療法体験によって感情の変化を感じたことにより、さらに心理学に興味を持ち、神奈川大学への興味も増したと言える。

参考文献：

坂野雄二ほか（1994）「気分調査票」『心理測定尺度集Ⅰ』サイエンス社pp. 249-254
ドラ・M・カルフ／山中康裕 監訳（1972/1999）『カルフ箱庭入門［新版］』誠信書房